



平成12年10月25日「本州最北端の地」にて  
(青森県大間町 大門崎)

今年の4月から当社仙台支店で支店長をさせていただいております。よろしくお願ひ致します。まずは、自己紹介ですが、新潟県長岡市出身、1952年1月生まれ、辰年の年男です。そのせいか、今年には波瀾万丈ですすんでいます。今年のいままでの出来事を羅列すると、入社以来20数年にして初めての転勤、他人事と思っていた単身赴任生活、技術屋でいたいと思っていたが営業職への転換、長男の大学進学による家族の離散、兄の突然の死、建設省北陸地方建設局長からの優良業務局長表彰の受賞。残り少ない今年ですが、これから何が起きるやら、ドキドキ、ワクワクで年の瀬を迎えています。

1975年3月に日本大学を卒業しました。当時は、ちょうど第二次オイルショックによる景気低迷が始まった時期です。1年先輩達のオイルショック前の就職状況を見ていましたが、求人数は大幅に減少し、大手企業の求人は数えるほどで、地方企業の求人が大幅に増加していたことを覚えています。私も1年先輩の就職先を訪問するなど、それなりの就職活動をし、某大手建設会社を志望しましたがあえなく拒否されました。その後、親の勧めもふるさとの県内企業にも興味が湧かず、いずれどうにかなるだろうという楽天的な気持ちで、卒業論文

## 私の履歴書

— 思いつくままに —

株式会社キタック 仙台支店  
川口 広司

の指導教授の研究室で助手見習いとしてお世話になることに決めました。

指導教授は、構造工学を専門とし、橋梁を主に力学を中心とした研究をしており、学科内でも屈指の「かたい」助教授です。当時、研究室では、模型実験や材料試験、及び当時普及し始めた電子計算機での力学の数値計算を使うテーマが主流でした。また、現場に出ることが好きで、関門橋見学、本四連絡橋の現場事務所への実務の勉強（これには助教授も参加した。）、また、当時建設中の東京湾岸道路の橋梁や沈埋トンネルの工事などの現場見学も多くこなし、「仕事で悩んだら現場で考えろ。」という指導教授の教えが研究室に浸透していました。

春休みに指導教授と次年度のテーマ探しを兼ねて、九州から沖縄にかけて分布が多い「石造りアーチ橋」の現地調査をしたこともあります。福岡から長崎、熊本、鹿児島、沖縄にかけて10日間の二人旅をし、石で積み上げられた橋や城のアーチ曲線の美しさに惹かれ、夢中で写真を撮ってきた感触をよく覚えています。この当時、沖縄で買った腕時計は、今でも私の腕で時を刻んでいます。

その後、我が助教授は、バンコクのアジア工科大学の教授として3年間の赴任を引き受け、それを機に私も研究室を退職することになりました。

研究室の手伝いをしながら自分で得たものは、いろいろな現場を見せていただいたこと、学生時代から行っていた模型実験とFEM解析手法の検討を進めるための数値解析の知識を整理させていただいたことです。FEM解析においては、面要素と線要素の接合方法を検討し構造解析に利用することがテーマでした。



現在、パソコンの容量はギガバイトの世界ですが、当時はまだキロバイトのレベルで、現在とは比較にならない程、小さな容量でした。(我々が使用していた大学の電子計算機で230キロバイトです。当時、東大の計算センターにあった計算機がメガバイトクラスだったと思いますが、何回か助教授の名前で借りたことがあり、その容量の大きさや計算スピードに感心していた記憶があります。)そのため、マトリクス計算をバンドマトリクスに組み替えることで、計算量や記憶容量の削減を計るなど、苦労したものです。

このような研究室に勤めていた時の「雑学」に、社会に出た後大いに助けられました。

大学の研究室を3年間で退職し、株式会社キタックに入社させていただきました。入社時は、それまでの経歴から、設計部へ配属でした。このころ、図面作成や数量計算の業務が多く、それらの図面や計算書は全て手書きです。字の下手くそな私にとっては成果品にするのが苦痛でした。また、技術的に未熟なくせに、先輩と道路設計の考え方などの論議(当時は、少し喧嘩っぽいところもあった。)をするなど、生意気(よく言えば積極的?)な社員であったと、今では反省しています。

そんな中で、入社半年後に当社で受注した道路の既設トンネル変状調査の現場担当をまかされ、トンネルの現場管理で10日間程の現場を経験しました。当時は未だ施工実績のない既設トンネルでのロックボルトの試験施工につき合い、以後、我が社での既設トンネルの変状調査の担当になっています。この仕事は、私の技術領域が土木設計から土質調査へと少しずつ移行していったきっかけの業務です。

当時の仕事は、国道8号の新潟県北部の葡萄峠に3つのトンネルがありますが、いずれも路面の隆起という変状を生じ、その原因調査から対策工設計までを、土木研究所や大学の先生方にご指導頂きながらまとめたものでした。トンネル周辺の応力集中をFEM解析で求め図化し、変状原因の整理の内部資料を作ったりもしてみました。現在では、新潟県内を中心とした、盤膨れトンネルの調査・対策工設計の事例も、20例近くになっています。これが縁で、トンネルの変状調査全般の仕事もさせていただくようになり、徐々に範囲も広がり、新潟県内のほとんどのトンネルを見させていただいています。平成10年にトンネル内でのコンクリート片

の落下で問題となったコールドジョイントの点検のお手伝いをしたり、その対策工の設計も現在させていただいています。

また、入社直後の昭和53年6月26日に新潟県内では豪雨があり、県内のいたるところで斜面崩壊や河川の越水・漏水による堤防の不安定化を生じました。新潟市周辺では、信濃川や中之口川の沿川を中心とし、広い範囲で冠水し大きな被害を受けています。災害復旧対策の設計で電算機を駆使し、先輩の手伝いですが、3~4日の徹夜で法面の安定計算や護岸矢板の計算をおこなったものです。そのような河川災害の中から発生した業務で、河川堤防の漏水や堤防の安定化検討業務を新潟県土木部や北陸地方建設局から頂き、河川堤防の土に関する勉強をさせていただきました。

現地踏査、堤防の土質調査、築堤の施工試験などを繰り返し、それらのデータをもとに、飽和・不飽和浸透流解析や地下水の平面準三次元解析を使い、築堤材料の選定や漏水対策などについて整理する業務をさせていただきました。平成9年に建設省河川局で実施した堤防の漏水詳細調査のローカル版に相当しますが、堤防安定化検討の一連の業務は、今でも私の良い財産と思っています。

いずれの業務も、就職にあぶれた時期に研究室で勉強させていただいた雑学が大いに役立ちました。今は亡き、指導教授に感謝・感謝です。私の専門とする分野は、大学時代に志していた「構造工学」から、仕事を通じて「土質」に移行してきました。これからも、まだまだ変化していきそうです。

ちなみに、我が師は、出来の悪い学生で、卒業させるために単位を出したとき、いつも学生にこんなことを言って念を押していました。「あなたには、応用力学の必要のないところに就職して欲しい。万が一、あなたに応用力学を指導した人の名前を聞かれても、絶対に私の名前を言うてはいけません。」

私は、今でも我が師の言いつけは「かたく」守っています。

平成11年に技術士の資格を頂きました。専門分野は建設部門の土質及び基礎です。専門とする項目は、意識したわけではありませんが、「土構造物」としました。いずれ、指導教授に報告するつもりです。